

2020年9月13日(日)／説教者：神谷武宏

説教：「海を二つに分けなさい」

聖書：出エジプト記14:5～18

イスラエルの民は、長年の奴隷状態から解放されてエジプトを出ることが出来た。しかし、エジプト王は再び民を捕らえに軍隊を投入する。迫り来る軍隊の恐怖に、民はエジプト脱出を後悔する。気が付けば、前には海、背後には軍隊。まさしく八方ふさがりである。モーセは民に、「恐れてはならない。落ち着いて、今日、あなたたちのために行われる主の救いを見なさい」という。これは前後左右、八方ふさがりの状況にあっても、私たちには上があるのではないかと言うことである。私たちには主がおられる。その主にゆだねて歩もうということ。信仰者とは、平面の生活をする者ではなく、立方の世界に生きる者である。八方ふさがりの苦難の時に神に祈ることができることは本当に幸いなことである。

神はモーセに言う。「海を二つに分けなさい」と。ここに大変不思議な、ダイナミックな御業が記されている。この「海を二つに分ける」とは何か？「海」とは、昔も今も巨大な力、未知の世界、暗黒の世界で、生きる恵みと同時に、死の恐怖も見せつけるもの。中世や近代、現代においても海を制するものは世界をも制するとされ、強大な船を造り続け、戦争に活用されてきた。ノアの箱舟の物語で全ての陸地が海に覆われるとある。しかしノアの箱舟だけは、その巨大な海に飲まれることはなかった。それは、海を制する神の力である。その巨大な「海を二つに分ける」ということは、神の力に勝るものはないというメッセージがそこにはある。

ただ、教会の歴史はその神の力を何に用いてきたのか。本当に神の力を信じて歩んできたのか。キング牧師の言葉に悔い改めを覚えたい。「教会ほど、妥協するという悲しむべき傾向がはっきりする場所はない。教会はこれまでしばしば、いろいろな型の多数意見を具体化し、維持し、祝福さえするために役立ってきた。教会がかつて、奴隷制や人種差別、戦争、経済的搾取などを是認したことは、教会が神の権威よりもこの世の権威に聞き従ってきた事実の証拠である。教会は、地域社会における道徳の守護者となるよう召されているのに、時々、不道徳で非倫理的なことを保護してきた。社会悪と戦うよう召されているのに、スタンドグラスの窓の中で沈黙を続けてきたのだ」(『汝の敵を愛せよ』p.28)。

この混沌とした日本の政治、世界の状況の中で、そして沖縄で起きている軍事基地の問題の中で、教会はどう向き合ってきたのか。その問題を教会のかだいとし、八方ふさがりの境地に立たされてきたか？教会は、「海を二つに分けなさい」という神の恵みを頂いてきたか？教会は、祈りと行動をもってこそ、その恵みに出会うのである。(神谷)